

發行 真言宗豊山派 靈松山歡喜院  
金剛寺

〒371-0241 前橋市苗ヶ島町1147  
TEL 027(283)6918 FAX 027(283)6815  
<http://www.rajin.com/kongouji/>



## あらゆる御縁をいただいて

臨濟宗 吉田一蓮

志田洋遠御住職を初めて紹介され仏縁をいたいたのは、私が柏川に住んでおり苗ヶ島の金剛寺さんが近いということでしたので、一九九年十一月前橋関根町の真言宗「故・青木智教御住職」金剛寺さんの客殿において、同じく今は故人になられた、油彩画家で手足に思い障害を持つ絵筆を口に力作二十三点の油彩画展を前橋市元総社町の鶴塚唯義さんの個展を観覧してくださった時でした。

その時の今でも忘れられない強烈な印象が最近お寺の御住職さんに多く見られないような、爽やかで豪放磊落この言葉。ピッタリに見受けられ今でもはつきり覚えております。

それが御縁となり、其の後年齢こそ私より若いのですが、尊敬出来る仏道の先輩として御指導をいただき、時には金剛寺さんに伺つておりました。

其の後現在ではコロナで休止致しておりますが、群馬諸宗教者の事務局で偶然御一緒になりましたが、「地方」の方で御両親が亡くなられても納骨できず困っていたお嬢さんの良き理解者であると共に素晴らしいアドバイザーで頭

動したのも昨日のようです。其の後暫くお会いする事なく時間が経過してしまいましたが、今年の春久しぶりに金剛寺さんにお邪魔致し、近況報告した中で「群馬ハンセン病問題の真の解決をめざしてともに生きる会」の事務局員の一員として微力ながら、会議や草津温泉栗生園の入所者の方々との交流をさせていただいている話の中、昔は癪病と呼ばれていたのがノルウェーのハンセンという方が「プロミン」という薬を発見してそれがハンセン病の特効薬として癪病といわれていた患者さんが助かるようになりその医師名を取つて「ハンセン病」と呼ばれるようになつた事やその昔神社や仏閣で放浪する患者さんを救済していたのですが、国の政策で明治後期患者を強制的に収容し療養所から一生出られなくなる「ハンセン病絶滅政策」が行われ差別や偏見が一層助長され、遺伝や伝染病では無いのだが微弱な感染症の為一度の病気になつた患者さんは世間一般の人々の厳しい眼にさらされ、最後には悲しくも家族に迷惑をかけない為に肉親と縁を引き裂かれるように生涯を療養所で過ごした入所者の人々を知つた瞬間から、今まで気づかなかつた

申証なさから、動ける限り私の使命としてハンセン病と共に生きる事を己に誓つて直ちに行動をおこし、草津の栗生樂泉園通りが始まりました。そして入所者と交流しているうちに、肉親と引き裂かれた方達の無念で、辛く淋しかつた人生、中でも同じ人間なのに、気持ち悪い汚らしいと見られ、この世に肉親がいるのに、いなない事を諦めざるをいない辛さは苦しかつたであろうと、共に泣けその時間を共有した事、数限りなくあります。

「どうしたら肉親に近いことが出来るのか?」と思案していたら、突然そのチャンスがやってきました。ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会長の故・舒(こだま)雄二さんの介添えをして、伊チゴを食べていただこうと口に入れただのですが、上手に出来なかつたのでよだれと共にテーブルの上に落としてしまつたのですが、落ちた伊チゴが私の口の中に入るのが早いかと思うくらいの早さで食べてしまつたのです。その瞬間舒さんの落とした伊チゴによだれがついていたので、私の口の中で血液とよだれと交わつて血縁関係の家族になれたんだと言いい、表わしようのない程嬉しい時間になりました。そしてその日から、すでに十五年は過ぎたのですが未だ健康なのでこれで伝染病ではないと世の人々に証明出来たと。今ではその事からしても沢山の方々に、もつともっとハンセン病を理解していただき、あらゆる差別・偏見を無くす世の中にして地球とその生きる全生命と共生共榮する社会であつて欲しいと願うこの頃です。私事ですが近況報告でした。

そして、この度真言宗開祖弘法大師「空海」御誕生千二百五十年にあたり「空海さん」の座像建立の開眼法会 誓におめでたい年度の寺報「道」に原稿のお話をいただき恥ずかしながらも引き受けさせていただきました。最後に金剛寺さんの志田洋遠御夫妻がいつまでもお健やかでありますように。

# 「六人会」

秋田県湯沢町

佐藤正吾



が、とても良い思い出になつていま  
す。

気がつけば、六人会全員が後期高齢  
者になつていました。早くコロナが終  
息し、再会できる日を待っています。

最後になりましたが、私が二年前に  
本屋さんで見つけて、感動した本を  
紹介させて下さい。本のタイトルは

「お袖をつかんで」作者 吉水岳彦  
(がくげん)氏若いお坊さんで「ひと  
さじの会」を発足させ、路上生活者等  
の葬送支援・炊き出し・災害支援等に  
活動もしています。

私たち六名が知り合い、卒業後も交  
流を継続して六十年になります。志田  
さんが声をあげてくれ、第一回目の会  
が、卒業後一年目に東京で行われまし  
た。その後の会合もほとんど東京で  
会つてきましたが、時には6人会の誰  
かの故郷を訪れたり、それぞれの結婚  
式に参列したり、個人的に誰かの元を  
訪れたり、交流は結構ありました。

ここ数年はコロナのせいで、全く会  
えませんでしたが、電話やメール等で  
連絡を取り合い、元気である事を確認  
し合っています。

自分の事を少し書きます。私は秋田  
県南端の山間で生まれ育ちました。宮  
城・山形・岩手と招している豪雪地で  
す。大学時代の四年間を除いては、  
ずっとここで暮らしています。小さな  
温泉がいくつもあり、冬はスキーの  
後、温泉につかって帰るという日常で  
しました。大学卒業後は、中学校教員とし  
て三十八年間勤務しました。大学では  
社会福祉を専攻しました。中学時代觀  
た「鐘の鳴る丘」という映画の影響で  
す。大学一年の時、施設での実習で、  
自分の体力と能力の不足を痛感し、早  
くも挫折してしまいました。それでも  
子供たちと接する仕事に就きたくて、

我が敬愛おくあにわざるところの友  
人、志田さんから、ある月、原稿の依  
頼がありました。後期高齢者の立場で  
いえば、文章を書くなどは考えれない  
事です。でも、志田さんからの依頼と  
あれば、「断わる」とい選択肢はあり  
ませんでした。今の事はすぐ忘れる年  
代になりましたが、昔の事はよく記憶  
しています。

思い起こしますと、私たち六名は一  
九六三年（昭和三十八年）大学に入学  
しました。大学での専攻はバラバラで  
したが、キャンパスで顔を合わせてい  
るうちに、なんとなく親しくなつたの  
だと思います。

私たちが入学した年は、翌年にオリ  
ンピックを控え、あちこちで工事中  
だつたり、オリンピック関係の建造物

ラッシュで、活気に満ちていました。  
人々はせわしなく、早足で歩き、絶え  
ず何か音がしていました。田舎者に  
とっては慣れにくいものでした。便利  
だった都電やトロリーバスが、あつと  
いう間に消えてしまったのも、その頃  
だつたと思います。都電は荒川線が  
残っていて、上京すると必ず乗りま  
す。

大学二年の時、東京オリンピックが  
ありました。開会式の日、チケットも  
ないのに開会式場に行つてみようと  
いう提案がありました。賛同者は都会  
育ちのOさんと田舎者の私だけでし  
た。最寄り駅で待ち合わせたのです  
が、ホームは人でいっぱい。よくめぐ  
り会えたと思います。人波に押される  
ようにして着いたのが、開会式場でし  
た。選手達が入場行進をするために、  
並んで立っていました。日本選手団が  
ゲート前に来た時、大学の先輩が出場  
していましたので、大声で名前を叫ん  
でいたら、目の前にいて、手を振つて  
くれました。たつたそれだけでした

本 「お袖をつかんで」  
著者 吉水 岳彦 (がくげん) 氏  
発行 光照院  
定価 1,100円(税込み)  
電話 03-3872-8487  
東京都台東区清川1-8-11





「縁」  
進藤  
宣夫

う。二人の共通話題人気は突出した記録づくめ謙虚な振る舞いと他者への尊敬の念を持ち接する姿だろうと思う。この二つのゲームは自分の趣味で樂しく沢山勉強させられた大ファンである。

さて本題の縁の始まりは六十二年前高校一年の時、高校三年生の現住職の志田洋遠さんと一緒にアルバイトをした事だ。住職と兄は同級生で穏やかで気楽な人だからと聞いていた。二学年違つても敬語を使うことなく一ヶ月働いた。お盆までだつたと思う。夏休み

今明るい話題はメジャーリーガーで二刀流の大谷翔平 秋の契約では数百億円説。

会社勤めとなり即野球部に入る。毎日二時間位練習した。当時週六日勤務で日曜祝日の休みで日曜はたいがい家にいた。毎日体を使つてるので頭も少し使おうと将棋も本をみていた。これが将棋との始まりで、兄と同級生という事で何度も志田家へ伺つた。またたく勝てないこんな弱い相手を帰るといつも帰してもらえず人質（大変失礼）みたいな時もあつた。その時は昼食を用意して頂き美味しかつた。ごちそうさま。

したが行く事にならなか志田さんはいなかつた。将棋大好きの当時三段の腕前の前住職（洋遠さんの父）よく來たと広間（現祭壇のある所）で兄と将棋が始まつた。自分は将棋にあまり興味がなかつたので大の字で寝てしまつた。

の宿題でNHKの「らんまん」と同じ  
ような高山植物で押し花を作つてくる  
ようにとの事で生物の先生には本当に  
まいった。兄に志田さんの家へ行く途

何度も足を運ばせたのかな…

何年か経ち（この間柔道に専念）将棋の本と遊んでいたらいつの間にか三度程「ホラ」話が出来る位に棋力が上がりついた。

朝十時頃から夕方五時位の記憶がある。何度負けてもあまり悔しさを感じなかつた。前主戦の温かさと謙虚さが

破り、名人戦と支部対抗戦県大会に出場一回戦で負けはしたものの実りのある年であった。年度末の月例会で今年の実績で免状の推薦をしてくれた半額以下で二段位を頂く事になった（現在の申請料金四万四千円）。

野球・ソフトボール・溪流釣りで休日まんばいで将棋は歳を取つてからでも出来るので「一区切り」つける事とし退部した。

五十歳になり桐生の愛好会に入会  
再出発し結構活躍したが書くほどでは

数年後志田さんが相応寺の兼務住職となつたと義弟より聞いた「へえ」と驚いた。知つてゐるよと少し自慢してみた。

何年か前に義父の十三回忌を金剛寺で供養した。その時現住職と再会した

「奇遇」だと何度も口にした義弟たちは、住職の名を読めるかと自慢したら読

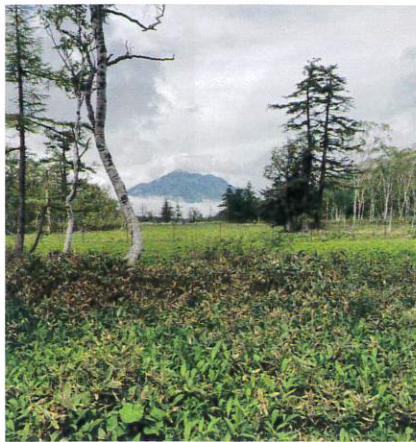
縁あつて義弟の奨めで相応寺にお世話になる事となつた。

今後とも末長くよろしくお願ひ致します。

合掌

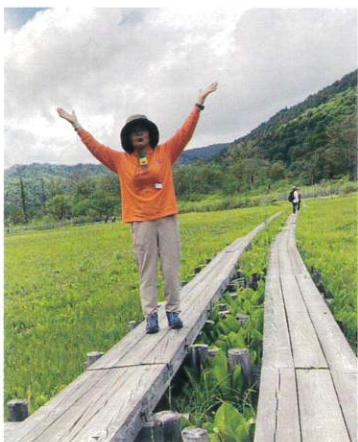


合掌



月、谷川岳の玄関口であるJR土合駅に出かけて長い階段を歩いたのをはじめ、五月はトロッコ列車「わっしー号」で間藤駅まで行って廃線跡を行ってこられました。

コロナ禍が沈静化してきた今年四月余りが過ぎました。「また、尾瀬沼に行つてみたい」。そんな思いが頭をもたげた頃、コロナ禍で三年間の自粛生活に入りました。その間、リハビリを兼ねて大室公園・大胡城跡・鹿田山などを歩き、スポーツジムにも通い、準備をしました。



六月はいよいよ、念願だった尾瀬バスツアーです。出発前まで土砂降りだった雨もやみ、鳩待峠駐車場から六〇分の予定で歩く所を倍の時間がかかるつてしましましたが、尾瀬ヶ原の木道に立つことができました。

余韻に浸る暇もなく、帰りの時間が迫ります。なんと辛く大変な上りでよう。集合時間にやつと間に合いました。七十二歳諦めずに頑張りました。

## 股関節手術から四年、尾瀬へ

大嶋 志津代

## 誕生一千二百五十年で大師像建立

～引揚体験を胸に平和を願う～

群馬県前橋市苗ヶ島の真言宗豊山派金剛寺で11日、弘法大師御誕生1250年記念として建立された大師坐像の開眼法要が営まれました。地元石材店を通じて中国東北部・満州から運搬されてきた志田洋遠住職(80)の世界平和への切実な願いが込められています。

檀信徒ら約60名が参列する中、志田住職は本堂で職衆10人と共に御誕生記念法要を厳修。続いて境内の弘法大師坐像の前で開眼法要を営んだ。

僧侶と檀信徒が唱える御宝号「南無大師遍照金剛」を受けて、同寺役員4人が除幕。志田住職は新しい筆に加持水を染み込ませ、石像の腹部に梵字を書く開眼作法を修した。檀信徒らも宝前に線香と手向け、大勢の喜捨と様々な願いを集めた大師像の完成を喜んだ。

志田住職は「皆さんのおかげでなんとか出来た」と感謝。総代の櫻井敏道氏(旧宮城村村長)は、大師像



に世界中の戦火の終息を祈念した。尾澤弘豊・中部宗務支所長は、社会活動で「蒼生の福を増やす」志田住職の祈りの具現化を祝福した。

4年ほど前に石像建立を発願した志田住職は、令和2年の暮れから1250枚の奉納を目指して「御宝号書写勧進」を開始。筆か筆ペンで和紙をなぞつて「南無大師遍照金剛」「真言宗開祖弘法大師」「空海」を書き写すオリジナル用紙を作成し、大師像宝前の台座に納める計画を立てた。

広く結縁を呼びかけると、全国から多くの御宝号書写と共に志納の浄財が寄せられた。中国に造像を発注したのは弘法大師が唐から密教を請來したことや志田住職自身の満州から引き揚げ体験、再び軍事的緊張がたかまつている東アジアの平和と世界の安寧を切に願う気持ちがあつたからだ。

コロナ禍とウクライナ戦争で全ての経費が高騰したため、大師像を覆う小さな御堂の建設を現時点では諦めざるを得なかつた。だが志田住職は、「その分、病疫と戦争の終息を強く祈る大師像になつた」と話した。

志田住職は日中戦争中昭和17年11月に満州で誕生。父は国家放送局アナウンサーだった。しかし3歳の時ソ連軍の侵攻に遭い、身重な母と2人必死に逃げた。

3歳時の曖昧な記憶だが、母は草原で妹を出産した。私が草を運んだんだから。妹は久美枝と名付けられたがすぐに亡くなり、荼毘に付して遺骨を箱に入れ日本に持ち帰つた」。父はシベリア拘留となり、「母と私は帰国して引き揚げ者の町があつた埼玉の春日部で暮らしていったが、父と再会できたのは2年後だった」。志田住職はそう回想し、



2023年（令和5年）  
6月29日 週刊仏教タイムス記載

「戦争は悲しみと苦しみしかもたらさない。どんなことがあっても起きていけない」と語気を強めた。今年から大師像宝前で戦没者慰靈法要を営む予定で、「引き揚げの途中で亡くなつた人がたくさんいる。また中国に慰靈に行きたい」。

大師像の開眼法要に参加した夫婦は、「御誕生1250年は伝統を受け継ぐお坊さんたちがいないとできない」と感動。妻は「私の誕生日がお大師さまと一緒に6月15日。御宝号書写には無病息災と書いた」と微笑んだ。



## 天明供養しべ 百万遍

筆 井上 良男氏

7月9日  
句碑開眼を行いました。



## 庫裏だより

真言宗豊山派褒賞顕彰式  
浅井貌下官長とともに



## 防御演習

**前橋** 文化財防火会（26日）に合わせて前橋市消防局は22日、同市苗ヶ島町の金剛寺で火災防御演習を行った。地元消防団などの70人が協力して本堂に一斉放水し、万に備えた写真。

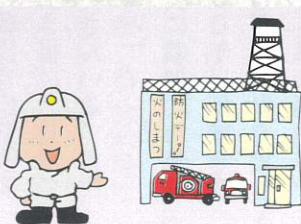
震度5弱の地震で出火した想定。寺の檀家が「火事だ」と叫びながら本堂から宝物を持ち出した。119番通報を受け、サイレンを鳴らした消防車が無線の指示に従つて配置に付き、隊員が素早くホースを延ばした。

志田洋遠住職（80）は「先輩たちが残した宝物をずっと大事にしよう」と話していた。（高野聰）



## 火から文化財守れ

金剛寺で  
防御演習



貼絵作家 池田けんえい

## 編集後記

創刊号から皆様のご協力のもと第十八号「成人式」を迎えることとなり感謝の気持ちでいっぱいです。

令和五年は弘法大師御誕生千二百五十年の吉祥年に石像建立にあたりご理解とご協力をいただき感謝致します。

本号特別寄稿に吉田一蓮様に御執筆いただきました。ハンセン病患者さんに対する思い深く感じました。

大学時代からの友人佐藤正吾様、相應寺檀徒の進藤宣夫様、そして上毛新聞の「ひろば」投稿の大嶋志津代様の同世代の人々に勇気と生きる希望を与えていただきました。

コロナ、物価高と日常生活が大変な中、当寺の為に御協力をいただき感謝致します。

志田洋遠住職（80）は「先輩たちが残した宝物をずっと大事にしよう」と話していた。（高野聰）



合掌

## 令和五年回忌一覧

一周忌	令和四年
三回忌	令和三年
七回忌	平成二十九年
十三回忌	平成二十三年
十七回忌	平成十九年
二十三回忌	平成十三年
二十五回忌	平成十一年
二十七回忌	平成九年
三十三回忌	平成三年
三十七回忌	昭和六十二年
五十回忌	昭和四十九年
百回忌	大正十三年

追善供養は毎年ご命日に行うのが本義です。  
この一覧表は一般的に行われている年回表を表したものです。

## 無料の子ども相談電話

一人で悩まないで

24時間子供SOSダイヤル  
**0120・0・78310**

いじめ問題やその他の子どものSOS  
24時間対応

チャイルドライン

**0120・99・7777**

18歳までの子ども専用。  
毎日午後4時～9時受けつけ

子育て・女性健康支援センター

**027・289・4339**

助産師による思春期の心と体の悩み相談  
毎週月・水・金曜の午後1～4時受けつけ